慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治討論が政治知識に与える影響に関するレビュー
Sub Title	
Author	金, 鐵鎔(Kim, Cheol Yong)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008.) ,p.106- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成19年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

呼ぶことにする。

3) 具体的な得点算出方法は，志岐 (2007) と同様であるので，それを参照のこと。

4) Family Communication Patterns 尺度は，元々メディアによる社会化に関する調査に用いるために作成された尺度であるが，介入行動に関する研究領域においても援用されてきた。社会志向 (socio-orientation) と概念志向 (concept-orientation) の 2 つの下位尺度から構成される。前者は調和的な関係を保持することに重点を置き，論争や議論を避ける傾向をあらわす。後者は，コミュニケーションを意見の伝達や共有のツールとしてとらえ，率直で積極的な議論を推奨する傾向をあらわす。しかし，親によるコントロール (control)，親の権力の主張 (assertion) を測定しているのではないかとの批判にも象徴されているとおり，実際の測定項目は保護者の教育・躾の傾向を測定している印象が強い。

5) この結果は，回答者が全員女性であるという点と関連している可能性があるため，更なる検討が必要である。

参考文献

Chaffee, S. H., McLeod, J., M., & Atkin, C. K. 1971 Parental influences on adolescent media use. *American Behavioral Scientist*, **14**, 323-340.

志岐裕子，2007，子どものテレビ視聴と保護者の介入行動．日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集，600-601.

上野顕子・鈴木敏子，1994　中学生の親子コミュニケーションの実態と背景—中学校技術・家庭の新設「家庭生活」領域の「家族の生活」の題材設定に向けて，横浜国立大学教育紀要，**34**, 95-106.

Valkenburg, P. M., Krcmar, M., Peeters, A. L., & Marseille, N. M.　1999 Developing a scale to assess three types television mediation: "Instructive Mediation," "Restrictive Mediation," and "Social Coviewing," *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, **43**, 52-66.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科

政治討論が政治知識に与える影響に関するレビュー

金　　鐵　　鎔*

1. はじめに

さまざまな議論が行われるインターネット上の電子掲示板はその利用者にどのような政治的効果を持つであろうか。そのような研究課題に対する答えを求め，政治討論が政治知識に与える影響に関するレビューを行った。

2. 政治討論が政治知識に影響を与えるメカニズム

政治討論が政治知識に与える影響のメカニズムに関しては，三つの説明が存在する (Eveland, 2004)。それは接触説明 (the exposure explanation)，予想精緻化説明 (the anticipatory elaboration explanation)，そして，討論による精緻化説明 (the discussion-generated elaboration explanation) である。

2-1. 接触説明 (the exposure explanation)

この説明によると，個人はニュース・メディアから直接情報を獲得するのとほとんど同じ方式で討論相手から情報を獲得する。政治会話やニュースに関する会話の中，その会話に参加している人がニュー

ス・メディア・ソースから得た情報は会話の一部分として再び引用され詳しく話される。そして，詳しく話されたその内容は政治知識として会話の相手に伝達されるのである。このように，この説明の文脈の中で，討論はただニュース・メディア接触と独立した，あるいはそれに追加された，関心のある情報 (information of interest) に接触する追加的な機会である。討論は，したがって，（新聞を読み返すのと同じような，接触の追加的機会を提供することによって）ニュース・メディアを利用する人々の知識だけでなく，（その個人が接触しなかった情報にアクセスする機会を提供することによって）ニュース・メディアを利用しない人々の知識にも貢献する。

しかし，このような説明に対する批判も存在する。それは，政治討論の中で得られた知識がすべて正しいとは限らない可能性があるということである。公衆の政治知識に関する実際の調査は公衆の政治知識水準があまり高くないことを示している (Eveland, 2004)。これは大部分の討論が正確な政治情報 (factual political information) の不在という問題を含んでいるか，あるいは最悪の場合，かなり間違った情報を含んでいるということを示唆する。

Lenart (1994, p. 78) は調査と実験から「メディアから得られた情報は個人から (interpersonally) 得られた他の情報によって歪められる可能性がある」と結論付けた。また，Gamson (1992) もフォーカス・グループ・インタービュー参加者が，他の個人から得た情報によってニュース・メディア報道を反駁するケースを報告している。これが事実であれば，ニュースと政治に関するある個人間の討論は，実際には，正確でない情報の移転 (transmission) によって，あるいは少なくとも有意味な学習の不在によって，討論相手の一方の知識の低下をもたらし得る。したがって，個人間討論においてコミュニケーションされる情報が必ずしも正確ではないということを知覚するのは重要である。接触説明によると，個人間討論からの個人の知識習得可能性は，討論相手が情報を多く持っている場合は高くなり，情報を少なく持っている討論相手の場合は低くなる。

2-2. 予想精緻化説明 (the anticipatory elaboration explanation)

この説明によると，今後政治トピックに関する討論が行われるであろうという予想はニュース内容に関する認知的精緻化を増加させる内的動機になる。このような増加した精緻化は主にメディア接触中に起こるが，潜在的には実際の討論が行われる前にいつでも起こり得る。つまり，政治トピックに関する討論への参加を予想している個人は政治情報に接触する場合，その情報を処理するのにより多くの精神的投資をするが，なぜなら彼らはこの情報に関する将来の討論へ参加することに対して準備したがるからである。

Eveland (2004) はマス・メディアの利用と満足アプローチが発見した多くの動機の中，「効用 (utility)」に注目する。特に彼は，「他の人との討論で利用する情報を獲得するためのメディア利用」と定義されるコミュニケーション的効用 (communicatory utility) を取り上げているが，これはメディア接触から学習したものを以後の会話で利用しようとする期待をもってメディアを利用することを指す。

Eveland (2004) は夕方のニュースの内容を討論することを予想する個人は，その内容について考えることにより多くの努力を投入する可能性があると指摘し，コミュニケーション的効用を持っている人々は，時間つぶしや娯楽などの他の動機を持っている人々より，ニュース内容の認知的精緻化により多く従事する可能性があると指摘する。

このような論理に従って，ニュース内容に関して将来討論が行われると予想することによって，

ニュース内容に関する精緻化は増加し，その増加した精緻化は政治知識の増加につながると Eveland (2004) は指摘する。彼は，討論と知識との関係に関する予想精緻化説明は，期待された討論が実際に行われることを必要としないということに注目することが重要であると指摘している。この説明において，増加した学習は，すべて，将来のインターパーソナル・コミュニケーションの前に行われる情報処理によるものであるということである。

2-3. 討論による精緻化説明 (the discussion-generated elaboration explanation)

この説明は，討論に参加する行為が有意味な情報処理過程をもたらし，したがって，討論中の情報処理による影響で学習が増加することを示唆する。

討論による精緻化説明の文脈の中で精緻化は二つの方式で促進され得ると指摘される。それは自らによるもの (self-generated) と会話の相手によるもの (conversation-partner-generated) である。自らによる精緻化の仮定は，討論に参加することは，本質的に，個人が，記憶から思い出した情報を再処理する必要があるということである。個人間討論で起こる意味構築過程において，個人はニュースから得た記憶の中の情報を，メディア接触中の情報処理とは異なる方式で表現しなければならない可能性がある。コミュニケーションの必要によって発生するこのような追加的な情報処理は，ニュース情報とより広い知識構造との間の追加的なリンクを作り出す。つまり，精緻化する。そして，このような精緻化は学習とその後の記憶を向上させる。自らによる精緻化において，精緻化はコミュニケーターがメッセージを加工し，それを討論相手に伝達する必要によって触発されるということに注目することは重要である。これにより，自分より情報を少なく持っている討論相手との討論によってもさらなる知識増加の効果が見られる可能性がる。

討論自体が精緻化を増加させる二つ目の方式，つまり，会話の相手による精緻化は，会話の相手が記憶の中にすでに存在するさまざまな考えの間の新しい関係を刺激する時発生する。討論相手による精緻化の促進は，会話の途中で発生する可能性もあり，また，会話が終わった後，その会話に関して個人が考える時発生する可能性もある。しかし，この場合，コミュニケーションを通じて精緻化を刺激するのは，会話の相手であることに注目することは重要である。これが接触説明と異なる点は，接触説明では討論相手から得た情報が新しい知識として追加されるが，討論相手による精緻化説明では討論相手から得た情報が知識構造の中で新しいリンクを作る刺激として機能するということである。

3. 今後の研究への示唆

上記の説明によると，政治に関する多様な意見が書き込まれているインターネット電子掲示板の利用は，政治情報と意見の精緻化過程をより促進することが期待される。そして，電子掲示板に自分の意見を書き込むことは実際討論に参加することであり，意見を書き込まなくて閲覧するだけでも疑似的な討論参加だと言える。その場合，討論による精緻化は，ニュース・メディア利用の時よりも活発になる可能性があり，インターネット電子掲示板が政治知識への影響因として働く可能性は大きいと期待される。

今後の課題は，実際のデータに基づき，インターネット電子掲示板利用行動の政治的効果を実証的検証することである。

参考文献

Eveland, Jr., W. P. (2004) The Effect of Political Discussion in Producing Informed Citizens : The Roles of Information, Motivation, and Elaboration, *Political Communication*, **21**, 177-193.
Gamson, W. A. (1992) *Talking Politics*, Cambridge University Press.
Lenart, S. (1994) *Shaping Political Attitudes: The Impact of Interpersonal Communication and Mass Media*, Sage Publications.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生

アニメーション，ゲームファンと「聖地巡礼」
——メディア・コミュニケーション論からのアプローチ——

平　井　智　尚*

はじめに

近年，「聖地巡礼」と呼ばれる現象が話題になっている。一般に聖地巡礼は宗教などで重要な場所とされる「聖地」を参拝し巡り歩くことを指す。ただ，昨今話題となっている聖地巡礼は，テレビアニメやゲームの作品の中で舞台になった場所にそれぞれのファンが行くことを指す。例えば，有名な「聖地」として，TV アニメ（漫画）『らき☆すた』の舞台となった埼玉県春日部市や鷲宮町，TV アニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の舞台となった兵庫県西宮市があげられる。

ここでいう「聖地巡礼」に類するような現象自体は新奇なものではない。テレビドラマの視聴者がロケ地を訪れるのも類似の現象である。実際にメディア・コミュニケーション研究の文脈では，TV ドラマのセットが再現されたテーマパークへの訪問を「メディア巡礼」と定義し，理論的に興味深い議論が行われている (Couldry, 2000, 2003)。

メディア巡礼で考察されるのは，テレビ・オーディエンスがフィクション（テレビドラマ）の一部に参加することで得るリアリティ，あるいはオーディエンスのアイデンティティや記憶の問題，そして「メディア世界」と「普通の世界」の区分などである。本論もこのような既存研究の視座は継承する。しかし，本論で対象とする聖地巡礼を考察する上では十分ではない。なぜならば，昨今の聖地巡礼は，日本におけるアニメーション，ゲームファンの位置づけ，メディアとしてのインターネットの存在，ネット文化への言及が肝要であり，これらを踏まえながらの考察が必要だからである。

1. アニメーション，ゲームのファンの位置づけ

そもそも聖地などというものは存在しない。聖地は作られるものである。その聖地を作るのは「ファン」と呼ばれる人たちである。周知のとおり，ファンとは，主にマス・メディアが生産するテクストを愛好し，それを様々な形で消費しながら，時には自らが二次的な創作物を制作する人々を指す。その語源が「fanatic」（熱狂者・狂信者）にあるように (Thompson, 1995)，ファンは肯定的にとらえられてい